

つまらない授業についての断想

近藤 和哉

「先生、この授業つまらなくないですか？」—これは、私が言われた台詞ではなくて、数年前のJ-Phone（ちょっと前のVodafone、いまのソフトバンク・モバイル）のCMで、黒澤優（故黒澤明監督の孫）が言い放った台詞です。舞台は、明るい日差しが差し込むとある高校の静かな教室。中年をやや過ぎた埃っぽい風采の男性教師が、チョークを手に、黒板に向かって。教師の視線の先にも、意識の中にも生徒の姿はなく、彼の声は、彼自身にさえ見放されたかのように虚ろに響く。生徒達の意識の中に教師の姿はもはやなく、その耳に教師の声は届かない。そのとき、窓際の席に座っていた長い黒髪の美しい女子生徒がすっと立ち上がり、まっすぐな視線を無防備な教師の背中に突き刺し、冒頭の台詞を吐く。振り向いた教師の顔に、はじめて表情が刻まれる。恐怖だ。・・・と、下手な説明で申し訳ありませんが（さらには、記憶違いもあるかも知れませんが）、だいたいこのような内容です。CM制作者の意図は、生徒側の世代の人たちに、あの女子生徒のイメージとJ-Phoneのイメージとを重ね合わせてもらって、商品を買ってもらおうというものだったのでしょうか、すでにauの長期契約割引プランに絡め取られていた私には、そのような効果は生じず、代わりに、いろいろと考えさせられたわけでした。

このCMを初めて見たときの印象は、彼女は素敵だな、という単純なものでしたが（制作者の罠にはまったわけです）、次には、自分が自分の教室で同じことを言われたらどうだろう、と考えました。「ですよね～。失礼しました～」と答えれば多少は受けそうだけれど、あとで自己嫌悪の天津波に襲われそうな気がする。「うーん、そうですか。がんばってはいるんですけど・・・。」という答えは、自分の

気持ちにはそこそこ近いように思うけれど、彼女の言葉に対する答えになっていないような気がする。その日の講義のできによっても答えは違ってくるだろうし、誰に言われたかというのも答えと無関係ではなさそうだし・・・。結局、変数が多すぎて一概には言えないなあという辺りで考えるのを止めてしまったような気がするのですが、今回、この原稿を書くに当たって、あのCM類似の状況で自分が言われたら、という仮定の下で改めて考えてみたところ、「ありがとう。」と言うのがいちばん相応しい答えなのかと、ふと思いつきました。彼女の台詞のポイントは、「先生、この授業つまらなくないです。」ではなかったことなのでしょう。彼女は、筆筒の裏のビー玉のように、教師自身にさえその存在を忘れられていた彼の魂に共鳴し、励ましていたのかも知れません。彼女の怒りは、教師の魂に覆い被さり、これを窒息させようとしていた言い訳の数々に向けられていたのかも知れません。あの台詞を言われたあと、教師は泣いたのかも知れないなあ、などと勝手な空想を巡らせていると、彼のことがなんだか羨ましくなってきました。最初は、自分にあんなこと言われたことがなくてよかった、と思っていたはずなのですが。

（法科大学院助教授）